

## シュルハーグ先生の来日について

今回日本気象学会の招待により Dr. Prof. Richard Scherhag 先生の来日を迎えるに当たり、その略歴の概要をお知らせしたい。

先生は1907年9月29日ライン河畔のデュッセルドルフに生れた。5才の時から雲と天気の関係に興味を持ち始め、13才で天気図を引いたという。ベルリン大学(今日東ベルリンにあるフンボルト大学の前身)に学び、1933年ハンブルグ海洋気象台にはいり、1937年ベルリン中央気象台(ライネケンドルフ区にあったが今はない)に移られた。第二次大戦中は有名な「天気解析と天気予報」『気候論』を執筆され、この二著はその後のドイツ気象学の出発点となっている。この中で特に上層発散説は有名である。戦後は米軍の占領下におけるバートキッシンゲンにあった中央気象局に於て、戦後のドイツ気象業務再建に尽くされたが、1949年今の所に先生の理想とする研究所を3人の仲間と共に建設する事となった。先生の理想と云うのは地球物理学全般の研究所であること、大学の気象学科として多くの傑れた気象学者の卵を作ること、地上から5mb迄の天気図を自力で発行し、毎日マップディスカッションを行い天気予報も発表し乍ら研究をすること等であって、こうした多面的な計画を実行するには大変な



Grefrat, Scherhag, Labitske

努力をされた。今日では100余人の気象学科学生(9学期制)と150余人の研究者や助手を擁するドイツ最大の研究機関となったが、その結果先生は本不意乍らも世界中で最も多忙な人の一人になってしまったし、又この複雑さが学生騒動の波に洗われるようにもなったのである。そ

れよりもこの様にして始めて有名な成層圏突然昇温の発見という一大成果が挙げられたこと、及び其の後に於て是に附随した多数の研究成果が続いて挙げられつつある事に注意を払わねばなるまい。ベルリン自由大学(FU)は元来文科系の大学であって、物理学科等は別になっているし、工科系は工業技術大学(TU)に綜合されている。又理論気象研究所も別にあるので、この研究所は云わばドイツの地球物理センターとでも呼んだ方が良いでしょう。その名は Institut für Meteorologie und Geophysik der Freien Universität Berlin と云う誠に舌を噛むような難かしい名前で、何とか便利な略語はないものかと思うがそれが無いので、例えば毎日のラジオ、テレビの天気予報にしてもこれだけの長い文句を必ずその前につけなければならぬことになっている。日本語で直訳すればベルリン自由大学地球物理気象研究所が最も短いのであろう。気象学の教育という面でもこの研究所の存在意義は極めて大きいものである。西ベルリンのみならず西ドイツ全体の各気象台の職員が多数こゝで養成されて居り東ベルリン気象台にも昔教わった人が多い。ハンブルグ大学等の大学や気象台の予報官の試験までも先生が口頭試問を実施されて居り、技術水準の統一に努力されていることがわかる。先生は土曜、日曜は自分で天気図を引いているしヨーロッパ中どこに出張されても常に速報天気図を手にして居られる。この点アメリカへ行かれた時は困られたそうで日本の漁業気象放送の様なものドイツでも是非欲しいと云って居られた。ある時「日本に行ったら何を見たいか」と聞いて見たら、「私は奈良とか、日光とか、芸者とかそう云った所謂文化と云うものは大して見たいとは思わない。一番見たいものは6米にもなろうと云う積雪と其中での人々の生活様式だ。(ベルリンの積雪は普通10cm以下)私はラジオ天気図を書き乍ら歩いて見たい。自分で天気図解析をやって見たい。毎日良い天気では退屈してしまう、暴風、豪雨等、気象変化が激しいのを見るのが、そしてそれがその土地土地でどう変るかを見てさえいれば、私は人生の意義を感じるのだ」と言われた。先生の話し方もこの様に内容に同時に多くの事を含めて云おうとするのが特徴である(大井正一記)